

平成27年度
学校関係者評価書

《実施日：平成28年1月27日》

〈専〉京都伝統工芸大学校

1. 目的

学校関係者評価は、社会に対して教育機関としての責任を果たしつつ、学校運営の絶え間ない改善を図り、もって学生が実践的な職業教育を受け、社会で活躍できる人材の育成につなげるために行うものである。

2. 学校関係者評価について

学校運営について学校が自ら行った自己評価を、学校から独立した学校関係者評価委員が再評価し、必要があれば改善に向け専門的な助言を行う。委員は、学生が就職する企業、卒業生、保護者、教育関係者から選定し、公平で中立的な評価を行うよう配慮している。今回は在校生アンケートの結果、自己点検・自己評価の結果、教育カリキュラム編成に関する提言を受けての改善、平成27年度教育計画、およびその他現状の報告を踏まえて、学校運営の改善方策の適切性ないし取り組みの適切性について審議した。

3. 学校関係者評価委員会

(1) 委員

西村 文則	京都府南丹教育局長
江崎 信芳	放送大学 京都学習センター所長
三田 康明	公益財団法人 京都府国際センター 常務理事
佐藤 幸男	京都府石材業協同組合 理事
遠藤 公誉	京都伝統工芸大学校 卒業生
玉村 嘉章	京都伝統工芸大学校 卒業生
田中 宏明	卒業生保護者

(2) 任期

委員任期を平成27年4月1日から28年3月31日とする。

4. 実施

平成28年1月27日（水）学校法人二本松学院3号館会議室において、学校関係者評価委員会が開催された。

5. 学校関係者評価委員会開催記録

(1) 理事長による開会の挨拶

あわせて各委員の挨拶を行った。

(2) 学校関係者評価委員会開催趣旨の確認

職業実践専門課程の認定をうけ、学校運営が当該制度の趣旨にかなったものとなっているか改めて自己点検・評価が行われた。会議の開催にあたり、学校関係者評価委員会は、評価委員が第三者の立場から自己点検・評価を再評価し、実践的な職業教育の実現につなげていくために行うことを確認した。

(3) 平成27年度自己点検・自己評価報告

「平成27年度京都伝統工芸大 自己評価報告書」の評価項目別取り組み状況について、概要の報告があった。

(4) 審議

ア. 学生アンケート結果による学校運営の改善方策の適切性

平成27年2月に全学年の在校生を対象として実施されたアンケートの結果をもとに学校運営の改善方策の適切性について審議した。

アンケートは、授業、学生生活、入学前後をとおした学校の印象という3つの項目について5段階で評価を求めるものであり（1－大変不満、2－不満、3－ふつう、4－良かった、5－大変よかった）、自由記入できるコメント欄も設けられている。結果としては、授業に関しておおむね3.0以上の評価を得ていた。新入生の「基礎加工実習」は、学生から非常に高い評価を得たほか、「書道」、「華道」、「茶道」、デザイン等の演習授業も高い評価となった。もともと、座学系は3.0程度と低い。座って聞いてばかりになるため、手足を動かす実習に慣れた学生にとっては物足りない面があるとのことである。学生生活についての評価も、「スクールバス」、「学生寮」、「事務の対応」などで3.0以上、高いもので3.7の評価となった。新入生の「学内学食」の評価が他に比べて低く3.0となっているが、それでも普通レベルの評価を得ていた。

学生構成が、高校生が半分、社会人が半分であって、社会人学生には大卒・大学院卒の者もあり、そういった学生にとっては、講義に対しての要求度が高くなることから、座学系で低めの評価となるのもやむを得ない。3,4年生では社会人学生が減るため、不満のある学生が減り、高評価の要因となるようである。そうであるならば、講義科目や演習科目の授業で3～4の評価が多くを占めているのは、概ね学生が満足しているものと考えてよいのではないか。

日本工芸史は2.9評価と低い結果となった。これは、講義系の科目などでは、学生に考え

る機会を与えようとするものの、最近の学生は、受身の姿勢で学ぶことに慣れており、自ら答えを導くことが苦手であるため、低評価につながったとされている。手足を使って、好きなことに没頭できる実習系授業を楽しんでいると感じる学生に、本格的に頭を使わせる座学系の授業をどう取り組ませるか苦労しているとのことである。授業時間の配分など難しい課題を多く含むが、創意工夫を重ね粘り強く取り組んでもらいたい。次年度の日本工芸史については改善を予定しているとのことであるので、経過を見守りたい。

イ. 教育カリキュラム編成への提言

平成27年度に行われた教育カリキュラムについて審議をした。前回の委員会にて提言をした点を受けて、改善がなされていた。以前は、国際交流、インターンシップ、ボランティア、の三つ活動について単位に反映されていなかったが、本年度より学則科目を変更し、単位化が行われた。学生による活動が活発に行われ、優先度の高いものから改善がはかられており、評価したい。インターンシップのみだった諸活動であるが、学則科目変更を経て選択肢を増やし、1年生から単位取得できるようになった。各活動に参加した学生からの単位取得申請が増えているとのことで、これらの活動に参加する学生の弾みとなったようである。卒業に必須の単位ではないものの、意識の高い企業であれば、就職活動の際に評価するポイントになると考えられる。今後もこの取り組みを続けていきたい。今後の改善項目としては、実習内容の改善と充実、業界と連携した見学会およびインターンシップの実施があげられた。業界との連携については、より専門的領域まで踏み込んでつながり構築していく方法を考える必要がある。実習内容と業界が求めているものとのミスマッチを防ぐことも重要である。前回提言した各種「免許」の取得の件、具体的には玉掛けやクレーン操作の資格については、KASD と連携することで、免許、講習へ参加できると考えるので、具体的に計画をすすめてみて欲しい。本年度はじめて実施した鯖江市（越前漆器）とのインターンシップは、学校と相手先企業との意識のずれを実感することとなった。バス見学ツアー、インターンシップと学生的好评をえ、さらに交通費、滞在費、歓迎式などを鯖江市が負担してくれたものの、直接的な就職にはつながらなかった。残念なことである。今後は、相手先企業は何を希望し、学校をその希望にどこまでこたえられるか話を詰める必要がある。また、鯖江市とは今後の改善策と、将来への期待について、話を進めることを期待する。

これから日本では、東京オリンピックにむけて 旅館ホテルの改修需要がある。京都においても、和を意識した「しつらえ」を各館とも意識している様子がみられる。フォーシーズンズホテル等、外資系も開業準備を進めている。近日は、知事と市長が連名で、これらの業界に「京もの」を使うよう依頼を出している。ホテルなどは内装等、かなりの部分をオーダーメイドで発注を掛けており、学生がそういった部分に入り込めたら、市場に向き合うよい機会になる。またプロのデザイナーとディスカッションするなかで、デザインの多文化共生に意識を向けさせることができる。若い人たちが、京都府や伝統産業界を通じ

て、うまくこの流れに入り込むことができればよい。学校は、この流れに卒業生をどのようにして入り込ませるが知恵を絞る必要がある。「京もの」については、府市が調達窓口を一本化している。学校単位で学生の参加を依頼することを考えてもよいだろう。国際センターも京都でホテル等の仕事につきたいという留学生を企業に斡旋している。ホテル等に対しては、相手先のキーパーソンと接触する必要がある。いずれにしても、学生を学校外の活動に参加させるにあたっては、学校側の窓口を作る必要がある。さまざまな動きに対応できるよう体制を整えておく必要がある。

ウ. その他

1月27日時点の出願状況では、受験料ベースで昨年度より42人多く、最終的には200人程度になると見込まれる。28年度から始まる京手描友禅専攻は、募集に向けた工芸体験キャンパスでも、参加者の関心の高さが感じられるという。当専攻のみのデッサンの試験が課されており、合格した11名は熱意が高い人ばかりである。仕事をやめて入ってくる人もいる。なおすべて女性である。NHK朝の連続テレビ小説のおかげで、着物への見方が変わってきている。今年の成人式は古典柄が多かったというが、現代の女性のあいだでは古いものに対する憧れが増えてきている様子である。学校での危機管理体制についても言及があった。年1回の消防訓練を実施して3年目になる。昨年は学内放送での退避勧告、退避行動、消防署の協力のもとでの放水訓練が実施された。今後は、南丹市と災害時のバックアップ等の協定は締結し、緊急時対応を充実させていくことが大切である。留学生を受け入れるにあたっては卒業した後の就職が問題になる。伝統工芸の仕事は単純労働とみなされているため、ビザの取得が困難である。工芸を「単純労働」とするのは国の施策として疑問があるが、この場で話をしても仕方がない。海外から来る熱い思いをもった人はとても貴重である。学校ともども、将来とても期待している。京都国際センターでは、海外からの留学生支援者を2名おかれている。就職での企業とのマッチングイベントも今年度すでに4回実施されており、京都だけでなく大阪の企業が参加している。ビザが取りやすくなる方法はないか方策を検討してはどうだろうか。

エ. 総括

今後の課題としては、2,500名を超える卒業生を輩出しているものの、計画性のあるフォローアップが十分できていない点があげられる。これは前回も指摘したところである。校友会や京都伝統工芸館・都島工芸美術館での作品展示や販売によって、卒業生の支援や交流は図られているが、さらなる工夫の余地はまだ残されていないか。伝統工芸の世界で職人や作家など様々な作り手として活躍している人材のネットワーク作りは、在学生の就職にもプラスに働く効果も考えられる。継続的に管理できるシステムを検討する必要がある。卒業生が一定の評価を得ているのが貴学の財産である。今後は、卒業生を集約したり、卒業生をひとつの集団としてネットワークを形成し、様々な活動に生かしていくこと

を考えていただきたい。そのような意味では、学校は、学生の「卒業後」に何ができるか、何をしてあげられるかが大事なものになっていく。

伝統が見直されていると感じる。先日も伊勢型紙の浴衣がテレビで宣伝されていた。地元の嵐山では外国人の着物姿をよく見る。そして、それがよく似合っている。加えて、海外からの関心が最近では高く、次年度志望者では10名を超えている。問い合わせも増えており、国別では中国7割、台湾2割、韓国1割ぐらいという。日本の文化を見直し、さらには新しく付加価値をつけて、国内外に発信していく動きが顕著である。伝統工芸の承継はもちろん大切なことではあるが、現代のニーズにあわせて改良し、提案していく人材が求められているのである。学校としては、こうした時流をおさえて教育内容を柔軟に変化させていくことが大切である。